

# 脇本遺跡 第17次調査

— 大型掘立柱遺構の調査 —



2011年8月

奈良県立橿原考古学研究所

## 1. はじめに

脇本遺跡は、奈良県桜井市脇本に所在する弥生時代から飛鳥時代にかけての遺跡です。この遺跡は、外鎌山と三輪山に囲まれた初瀬谷に立地し、大和と東国を結ぶ交通の要衝にあたります。また周辺一帯は、雄略天皇の「泊瀬朝倉宮」（はつせあさくらのみや）や大来皇女の泊瀬斎宮（はつせいつきのみや）などが営まれた場所として注目されています。

## 2. 調査の内容

地表下から、東西6間（12m）以上、南北3間（8m）となる柱穴14基を検出しました。これらの柱穴は、整地を行った後に掘り込まれています。柱穴の規模は長辺1.3～1.5mと大きなものです。柱には直径35～45cm程度の木材を使用し、最終的には抜き取られています。現時点では、これらの柱穴が建物になるのか柵になるのかは確定できません。時期は、整地土中から出土した遺物から、7世紀代（飛鳥時代）と考えられます。

## 3. まとめ

脇本遺跡では、「磯城・磐余の諸宮調査会」による第1次調査から第5次調査において、今回確認した飛鳥時代の柱穴とよく似た遺構が見つかっています。これらの調査では、100m四方に造成された平坦面上で、5世紀後半・6世紀後半・7世紀後半の3時期にわたる大型建物や柵が検出されています。このうち、正方位に並ぶ柱穴は7世紀後半とされ、天武天皇の皇女である大来皇女が伊勢神宮に奉仕するため、泊瀬斎宮（はつせいつきのみや）で心身を清めたという『日本書紀』にみえる記録との関連が注目されます。また、第15次調査では1.6×2.0mもの柱穴を有する7世紀前後の大型建物が建てられていることもわかりました。このように、脇本遺跡は古墳時代から飛鳥時代まで継続して大型建物や柵などが建てられていることと立地条件などから、支配者層の住まいの変遷を考える上で非常に重要な遺跡といえます。

（井上主税・田中大）



脇本遺跡第17次調査 現地説明会資料 2011年8月20日

奈良県立橿原考古学研究所 〒634-0065 奈良県橿原市畝傍町1番地 TEL0744-24-1101 <http://www.kashikoken.jp/>